赤間関討入船

坂崎磐音と中川淳庵の二人連れが長崎を目前にした日見峠に差しかかったのは、７月中旬のことである。

どこか異郷の調べを思わせる祭囃子が響いてきた。

「重陽の節句の九月九日、諏訪大社で催される長崎くんちのしゃぎりの調べですよ」

と淳庵が教えてくれた。

日田代官領での邂逅以来、二人は旅を重ねて兄弟のように親しくなっていた。

淳庵は、旅の間じゅう、南蛮の医学の進歩について語って飽きることがなかった。そして、話の最後にはいつも、

「南蛮の医学に追いつくには、私たちが不眠不休で努力をしても何百年とかかるやもしれません。だが、それをやらねば、日本は世界から取り残されたまま孤立していくことになる」

と自らを戒めるように言ったものだ。

磐音は、南蛮の医学を純粋に信じる淳庵が羨ましかった。その目的に向かって突き進む蘭医を尊敬した。

「坂崎さん」

と、汗を拭いた淳庵が意を決したように呼びかけた。

「この峠を下れば、長崎の町です。坂崎さんは長崎に何の用です。差し支えなければ話してくれませんか」

淳庵にはこれまで御家騒動にからんで藩を抜け、江戸で暮らすことなどを簡単に話していた。

だが、長崎になぜ行かねばならないかは、話さなかったし、淳庵も聞こうとはしなかった。

峠の下に長崎湾を望遠したとき、その淳庵が訊いたのだ。それはなんらかの手助けができないかと考えたからであろう。

「許婚を遊里から助け出すべく参るところです」

「なんですって！坂崎さんの許婚が丸山におられるのですか」

思いがけないことを聞かされたというように淳庵が磐音の顔を正視した。

「坂を下りながらお話します……」

磐音は藩名を伏せて、国家老の策略に乗せられて江戸から国表に戻った磐音、河出慎之輔、小林琴平の幼馴染の三人が相戦わせて、二人の友人が死んだことや、その事件に絡んで河出家も小林家も改易されたこと、琴平の妹であり、許婚であった奈緒が病に倒れた父親を助けるために自ら遊里に身売りしたことなどを話した。

豊後関前藩を揺るがした事件の背後には、国家老宍戸文六の老害があった。

藩中興の祖とあがめられた文六は、晩年になって藩の政治を専断し、私物化する傾向が甚だしくなった。そのために藩財政は逼迫し、不正な多額の借財さえ藩は持たされていた。

そのような折り、江戸勤番を終えた磐音らは、新しい藩の再建策を携えて関前に戻って来た。そのことに危機感を募らせた文六が先手をとって、改革派の磐音らを破滅の淵を追い込んだのだ。

「奈緒どのは、私が密かに国許に帰っていることも知らず、病に倒れた父親の治療代を工面するために城下の遊里に自ら出向いて、身売りを決めたのです」

磐音は、橦木町の妓楼さのやを訪ねて、その経緯を知った。女将は磐音が奈緒の許婚と知ると、

「まあ……」

としばし言葉を失ったあと、

「坂崎様、奈緒様のように自ら遊里に身を落とす方は珍しゅうございます。私は何度も奈緒様に念を押しました、いったん遊女の身に落ちたからには、生涯這い上がれないものと覚悟してくださいとも申しました。ですが、奈緒様のお気持ちは堅く、私に残された道はこれしかございませんと、はっきりと答えられたのです」

磐音はいたたまれない気持ちで女将の言葉を聞いた。

「坂崎様、奈緒様が望まれたことはただ一つにございました。関前から遠い地に身売りしたいということでした」

「そこまで覚悟を……」

「私は、そこまでおっしゃるにはそれなりの事情がおありだろうと、関前城下に顔を出す女衒の季平に相談したのです。季平は西国筋の格式の高い妓楼と繋がってまして、私の話を聞いて奈緒様を一目見た途端、女将、こりゃあ、田舎女郎にしたんじゃもったいないと、長崎の丸山ではどうかと言い出したのです。奈緒様も、長崎なれば関前から遠いゆえ、お願い申しますと、私と季平に頭を下げられたのです。身売りの金は、百両、遊女一人には破格の値です。うちと女衒の季平の手数料を差し引いた六十両を、奈緒様が関前を発たれた日に、私が小林助成様に確かに届けましてございます。

「季平が奈緒どのを連れていった長崎の妓楼はどこじゃ」

「望海楼にございます」

と答えた女将は、

「坂崎様、肥前長崎に参られますので」

「参る。奈緒どのが待っておるでな」

なにかを言いかけた女将はそのまま口を閉ざした。

「望海楼か」

とおおよその話を聞いた中川淳庵が呟いた。

「あの楼は、丸山でも一、二を争う遊郭で、遊女も粒よりです。それだけに……」

「……それだけに、なんでしょうか」

「望海楼の遊女と遊べるのは、南蛮人や唐人、それに大尽という話を聞いたことがあります」

磐音は黙って頷いた。

奈緒が身売り先でどんな扱いを受けていようと、驚いたり嘆いたりするまいと覚悟の上の旅であった。

「坂崎さん、奈緒どのを身請けなさる気ですか」

「そのような大金の持ち合わせはございません」

淳庵が磐音を見た。

「ええ、無謀なことは分かってます。ですが、なにか策があるかもしれません。奈緒どのは苦しんでいるのです。そのことを考えればそれがしはなんでもできる。いや、せねばなりません」

淳庵は磐音の顔をじっと見ていたが、再び歩き出し、

「なにか手立てを考えましょうか」

と洩らし、また足を止めた。

「望海楼となれば、なにをするにしてもそれなりの接し方がいります。私の先生にも相談いたしますゆえ、坂崎さん、それまでは早まらないでください。よいですか」

「承知しました」

豊前大里から五十七里、中島川沿いに、二人は長崎街道の終着点に辿り着いた。

旧暦九月の九日、重陽の節句に催された諏訪大社の例大祭の「おくんち」を前に、町はどことなくのどかだった。

それにしても長崎の町は、坂崎磐音が知る江戸とも上方の町とも異なる情緒を漂わせて、磐音の心を弾ませた。色、香り、吹き付ける潮風までがどこか違っているのだ。さらに珍しい装束と髪型で行き交う唐人の町に奈緒がいると思うと緊張もした。

「南蛮人は見かけませんね」

「坂崎さん、阿蘭陀人は出島という、湾に造られた人工の島に閉じ込められているのです。彼らは町を自由に歩くわけにはいかないのですよ」

「なぜそのようなことを」

「根本は幕府の海禁政策の一環ですが、出島に閉じ込めたのは、切支丹布教を恐れてのことなのです」

長崎について何も知らない磐音に淳庵が丁寧に説明してくれた。

「唐人は今でこそ唐人屋敷に押し込められていますが、昔は町家に住んでいたのです。それに唐人は崇福寺、興福寺、福済寺など唐寺を建てて、切支丹ではないことを長崎代官に繰り返し訴えたせいもあって、比較的自由に町を歩けるのです」

磐音は何も知らない自分を恥じた。

「私は蘭医の筆峰神仙先生の蘭学塾に寄宿します。坂崎さんはどうなさいますか」

「神仙先生の塾は、どこにあるのですか」

「出島の前の江戸町にあります」

「その近くに旅籠はありますか」

「出島の前ですから、水夫や商人相手の旅籠はいくらもあります。もしよければ、私が泊まったことのある『おらんだや』にお連れしましょうか。蘭学塾とも通りを一本隔てただけで、あのへんで神仙先生の診療所といえば、だれもが知っています」

「ぜひお願いします」

承知しましたと胸を叩いた淳庵が、

「坂崎さんのお陰でなんとか長崎まで辿りつけました。礼を申します」

と改めて頭を下げた。

「不忍坊らが諦めたとも思えない。これからも身辺には気をつけてください」

磐音は旅の間、何度か、尖った監視の眼を感じていた。だが、磐音がいるせいか、眼が正体を晒すことはなかった。

「ほれ、出島が見えてきました」

中島川に架かる最後の橋詰に立った淳庵が指差した。

長崎の海に突き出して、“島”は東西に扇状に浮かんでいた。石垣と白の練塀に囲まれた島の中央に異国の旗が夕暮れの陽を浴びて翩翻と翻り、異郷の香りが海風と一緒に漂ってきた。

「出島は商館長の阿蘭陀人が住んでいるのですか」

「普段は商館長のカピタンを筆頭に、荷倉係や医師、黒い肌をした下僕まで二十人ほどが暮らしていると聞いたことがあります」

と言った淳庵は、

「だが、今は南蛮船が入ってきますから、島も賑やかでしょう」

淳庵はそのことを承知で長崎を訪問したようだ。

二人が話す新大橋を、中島川の対岸から足を止めて凝視する人物がいた。

小僧を従えた、豊後関前藩の元の御用商人西国屋の番頭清蔵だ。

西国屋の主の次太夫は、豊後関前藩の国家老宍戸文六の庇護のもとに商いの勢力を伸ばした。が、磐音に捕らわれて不正に加担した追及を受け、宍戸文六の悪事を証言するとを条件に命を助けられていた。

むろん城下にあった西国屋の店と家財は藩に没収されて、関前藩再建の資金に組み込まれていた。

清蔵も御直目付の中居半蔵に厳しい糾弾を受けて、宍戸文六を破滅に追い込む証言をした一人だ。

磐音の顔を見知った清蔵は、主の次太夫と家族ともども、長崎の出店を頼りにこの地に逃れてきていた。

「はて、おかしなことがあるものよ。なんで坂崎磐音がこの長崎に」

小僧を先に店に戻した清蔵は、歩き出した二人をつけていった。

二人が訪ねた先は、江戸町の旅籠のおらんだやだ。

どうしたものかと清蔵がしばらく眺めていると、坊主頭だけが出てきて、旅籠近くの蘭学塾の門を潜った。

どうやら一人は蘭学の医者らしい。

（西国屋を破滅に追い込んだあやつをどうしたものか）

次太夫は長崎に向かう道中、

「清蔵、私は悔しいよ。折角豊後関前を拠点に商いを広げようとした矢先、江戸から中老の倅が戻って来て、すべてを無にしてしまいおった。なんとしても一矢報いたいものじゃが、多勢に無勢では勝負になりません」

と言い暮らしてきたのだ。だが、坂崎磐音一人、長崎に来たとあらば、なんとでも始末のつけようはある。まずは旦那様に相談だと清蔵は身を翻した。

磐音は、おらんだやで夕餉を済ました後、着流し姿でふらりと町に出た。

六つ半の頃合だ。

格別に行きたい場所があったわけではない。だが、奈緒がいる町でじっと旅籠に居続けることが耐えられなかった。

それでも旅籠を出る前に番頭に丸山の在所を訊いた。

「長崎にお着きなさった夜から元気なこつですばい」

「いや、そのようなことではござらぬ」

「よかよか、若いうちは元気なくらいがちょうどよかろ」

と勝手に決め込んだ老番頭は、丸山の場所を教えてくれた。

長崎の町は、江戸の浅草辺りのよう洋灯の光が散乱していた。そんな通りから辻へと磐音はそぞろ歩いていった。

町のあちこちでおくんちの稽古のしゃぎりが響いていた。それがふいに弦楽の調べに変わった。

肥前長崎の丸山遊郭は、天正十六年以前にあった新紺屋町、新高麗町、大井手町、今石灰町、古町などにあった遊び場所を併合して新設された。のちに、博多の須崎町から遊女屋の恵比寿屋が遊女とともに移り住み、さらに充実することになる。

古くは寄合町と呼ばれた古町を起源とした丸山は、太夫町と寄合町の総称であった。

遊里丸山の全盛期は、元禄を中心に宝永にいたる二十数年といわれた。その折り、遊女屋七十数軒、遊女は八百人に近い数であったという。

江戸の吉原、京の島原に匹敵する遊里丸山を支えたのは、南蛮貿易、唐人貿易の巨額の商取引だ。鎖国日本のただ一つの異国の窓口長崎に到来する珍奇高価な物産を得んと豪商たちが長崎に雲集し、唐船の、南蛮船の荷を競い合ったからだ。

金が流れれば、遊里は栄える道理である。

かつて長崎に入港した南蛮人や唐人のもとに、遊郭の宿主は小舟を差し向けて客を迎えに行かせ、好みの遊女を船に連れ戻らせたという。だが、元禄元年に出島を見習って、唐人たちも唐人屋敷に押し込められ、異国の者が丸山に通う風情は消えていた。

一方で阿蘭陀の出島も唐人屋敷も、

傾城の外女入事

を禁じていた。つまりは阿蘭陀人や唐人が丸山に通えぬ代わりに、遊女たちが出島や唐人屋敷に出入りすることができたのだ。

丸山の遊女は、

一に阿蘭陀行

二に唐人行

と呼ばれて格付けされ、

奇妙にも和人の客を、

日本行

と区別したともいう。

磐音は、さんざめく紅灯の巷をただひたすら歩いた。すると三階建ての高楼の前に出た。それが奈緒のいるという望海楼であった。

（奈緒、待っておれ）

磐音は心でそう呟くことしかできなかった。

懐には江戸から豊後関前に旅した金がわずかに残っているだけだ。今日明日の旅籠代も心許なく、遊里に入るなど及びもつかない懐具合だ。

（なんぞ働き口を見つけぬとな）

磐音は奈緒がいるはずの望海楼に背を向けた。

磐音は本石灰町から銅座町への橋を渡った。

そのとき、磐音は前後を唐人に囲まれていた。

裾が翻った長衣に羅紗の鍔広帽子、泥鰌髭の水夫たちの手に、湾曲した身幅の広い青龍刀や長剣があった。

「サカザキカ」

六尺を超える大人が異国訛りで訊いた。

「坂崎だが、なにか用ですか」

初めての町だ、知り合いがいるはずもない。

中川淳庵を襲った岸流不忍坊の関係にしてもちとおかしい。

「シンデクダサイ」

大人の撓る長剣が抜かれた。仲間が異国の得物を抜き連れた。

「そなたらとは面識もないが」

鷹揚な受け答えを無視して、撓り伸びた剣先が磐音の胸を襲った。

磐音が飛び下がった。

そのとき、初めて包平二尺七寸の豪剣に手をかけた。

大人のかたわらから青龍刀が疾風をまいて襲ってきた。

磐音の右手が翻ったとき、青龍刀の重い打撃に合わせ、その力を吸い取るように弾いていた。

相手の躍動する身体が流れた。

包平が虚空に躍って相手の脇腹を浅く跳ね切っていた。

斬るつもりはなかった。峰に返す間がなかったのだ。

血飛沫が石の橋に散った。

磐音は包平を峰に返した。

異国の悲鳴と憤怒の声が交錯して、大人の長剣が磐音の眉間に伸びてきた。

磐音は撓る剣の攻撃を、手首を柔らかくして受けた。

相手の切っ先がそれでもくねり曲がって磐音の袖を掠めた。

大人の二撃目をさらに受け流した磐音は、磐音の背に回ろうとした相手に向かって飛んでいた。

飛びながらも峰に返された包平が夜気を裂いて伸ばされ、脇腹を痛打していた。

二人目が足をもつれさせて倒れ込んだ。

磐音は再び包平の刃を立てると、

「これからは容赦せぬ」

と宣言した。

大人の口から口笛が鳴らされた。

退却の合図に襲撃者たちは、磐音が脇腹を切った仲間一人を残して夜の闇に溶け込んだ。

磐音は血刀を下げたまま、脇腹を斬った相手に歩み寄った。手にしていた青竜刀を足先で蹴飛ばした。深手を負わせたつもりはない。

「たれに頼まれたな」

言葉が分からぬのか、怯えた顔を激しく横に振った。見ればまだ若い顔だ。

「このままでは死ぬぞ。そなたが話せば、知り合いの医師のところに連れて行こう」

言葉が分からぬのか、ただ顔を激しく横に振った。

磐音は包平を鞘に戻すと、若い唐人を両腕で抱え上げ、先ほど別れたばかりの中川淳庵が滞在している蘭学塾へと向かった。